HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	会話の上達度を計る評価基準
Author(s)	中川, 道子; 石島, 満沙子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 2, 169-185
Issue Date	1998-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45570
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC002_013.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第2号　(1998)

会話の上達度を計る評価基準

中川　道子・石島満沙子

要　旨

本稿では一般の日本人が外国人の日本語が「上手になった」と評価する時の基準を調べ、日本語教育機関で用いられている到達度的試験の評価基準と比べてみた。また、一般日本人と日本語教師による上達度の評価基準とその判定結果に差異があるのか、についても調べた。調査方法としては、一般日本人と日本語教師に日本語学習者が異なる時期に行った2つのロールプレイの優劣を判定してもらい、自由にその理由をあげてもらった。

調査の結果、上達度を計る場合の一般日本人の評価基準は文法・語彙・表現、音声、非言語、会話運用能力、内容、社会的言語表現の順に重きを置いて評価していることがわかった。この中の非言語の評価項目は到達度的試験の評価基準には設定されていないことが多い。日本語教師は一般日本人よりさらに文法・語彙・表現などの言語的側面に注目しており非言語面に対する視点は少なかった。

〔キーワード〕上達度、評価基準、一般日本人、日本語教師、非言語

1. はじめに

私達日本人は久し振りに会った留学生（日本語学習者）に対し「日本語が随分上手になった」と感じることがしばしばある。このような時に日本人はこの学習者の日本語の「どこがどのように上手になった」と具体的に取り上げているのではなく、ほとんど無意識的に漠然と「上手になった」と言っていることが多い。日本語学習者は日本語教育機関外で一般日本人と接触しており、常に一般日本人から評価を受ける状況にある。このことから、一般日本人が「上手になった」という評価をどのような視点で行っているかを明らかにすることは意義があると思われる。

そこで本稿では「上手になった」と判断する場合の一般日本人の評価基準が何かを調べて、日本語教師の評価基準と比較してみる。その結果、両

者に差異が見られれば日本語教師にとっては異なる観点からの示唆が得られることになり、今後の指導にも有益であろう。

その方法として、4人の日本語学習者がそれぞれ時期を隔てて行った2つのロールプレイを一般日本人に見せて、どちらがどのような点（評価項目）で「上手になっているか」を書き出してもらう。次にこれらの評価項目と先行研究で述べられている到達度的試験やプロチーブメント・テストでの評価項目との差異についてみてみる。さらに、この4人の日本語学習者の教育に携わっていない日本語教師に同様の調査を行って評価項目を調べ、一般日本人と違いがあるかをみる。

2. 先行研究

2.1 評価基準について

ここ数年口頭表現能力の評価に関する研究が数多く報告されている。それらの多くはある期間日本語を学習した後に行う口頭能力試験(到達度的)に関するものであり、その評価基準の設定には全米外国語教育協会（ＡＣＴＦＬ）が開発した口頭能力面接試験（ＯＰＩ）での4基準「総合的タスク・機能」、「場面（コンテクスト）・内容」、「正確さ」、「テキスト・談話の型」を参考にしている。

上達度を計る評価基準との比較において、これらの報告の中で評価基準がどのように設定されているかをみておく。

(1)庄司恵雄（1996）は国費留学生のための予備教育課程での口頭能力試験の標準化を目指す「日本語研修コースのための口頭能力修了試験」についての報告をしている。庄司はＯＰＩを参照して到達度テストの性格をもつ修了試験の評価基準を7項目に設定し、さらに修了時に習得していなければならないレベルαと、習得しなくても困らないが習得していればより望ましいレベルβを設けてインタビューとロールプレイで口頭能力を評価した。7項目とα、βの基準は以下である。

〈1談話構成〉 α：文レベルの発話が維持できるか、β：段落形成ができるか

〈2文法〉 α：文形成のための必須要素（助詞、述語、語順）を適切に使用できるか、β：文形成のための非必須要素（副詞など文に意味を添える語の使用、接続詞など文をつなぐ語の使用、連体修飾節の出現度）

〈3語彙〉 α：日常生活で使われる最小限の語彙が正確に使用できるか、

β：α以外の語彙が正確に使用できるか

〈4流暢さ〉 α：文レベルの発話に関する流暢さはどうか、β：複文・段落レベルの発話に関する流暢さはどうか

〈5発音〉 α：α語彙の調音・アクセントは正確か、β：β語彙の調音、アクセントは正確か、文末イントネーションは自然か

〈6会話運用能力〉 α：自発性が維持できるか、β：発話権の奪取、維持譲与に関する談話管理能力があるか

〈7社会言語的能力〉 α：インタビューにおいて「です、ます」体が使用できるか、β：ロールプレイで要求される発話機能に即した待遇表現が適切か（尊敬語的表現の正確さ、謙譲語的表現の使用）

庄司はこの基準で行われた評価結果について一定の信頼度を得たとしている。

ここで設定されている評価基準はすべて言語的側面に関わっているものと言えよう。

(2)横溝紳一郎（1988）はハワイ大学においてアチーブメント・テストとして行われているオーラル・インタビューテストにプロフィシェンシー的な要素を加えて、プロチーブメント化を試み、「オーラル・プロチーブメント・インタビュー（ＯＩＵＨ）＝プロフィシェンシーとアチーブメント統合の試み＝」として報告している。プロチーブメント・テストとは既習項目範囲以内でのテスト結果が一般的な言語能力を反映するように考えられたものである。インタビューテストは導入部→ロールプレイ→終結部の段階に分かれ、ロールプレイが評価の主要部分になっている。ここでの評価基準は以下の５つである。

〈1文法的正確さ〉 既習項目をどの程度文法的に正確に使用するか

〈2タスク遂行〉 色々な質問に答え、ロールプレイの開始、維持、終結ができるか

〈3発音〉 一音一音の明瞭さ・正確さだけでなく、アクセント、イントネーション等の語・文レベルも含む

〈4スピーチの適切さ〉話す相手により話し方を適切に変化させられるか、敬語使用や「です・ます・だ体」の使い分けの適切さをみる

〈5日本語話者としての自然さ〉 日本人に快く受け入れられる行為が言語面とノンバーバルな面の両面でどの程度自然に行なえるかをみる

横溝はＯＩＵＨをＯＰＩと比較検討した結果、ＯＩＵＨは基本的にはア

チーブメント・テストでプロチーブメント的要素は少ししか加えられていなかったとしている。彼はこれをよりプロチーブメント・テスト的にするにはテストの形式、内容、評価法等をかえる必要があるとし、その一案を示している。しかし、テストをプロチーブメント化するかどうかはその教育機関のカリキュラム全体で考えるべき問題であるとしている。

ここでの評価項目をみると、庄司（1996）と異なり非言語面での項目が設けられている。

2.2 一般日本人の視点

日本語学習者が行ったロールプレイに対する一般日本人の評価について原田ら（1998）は「一般の日本人は学習者の日本語をどのように評価するか」の中で、小池ら（1998）は「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本人教師と一般日本人のずれ」の中で報告している。これらの報告は一般日本人２人による評価についてのパイロットスタディであるが「上達度を計る」場合での一般日本人の評価との違いを見るために以下に両者の調査結果を見ておきたい。

原田らと小池らは国費留学生のための予備教育での会話授業で教えるべき項目の抽出とシラバスの構築を目指しているが、その一環としてこの調査を行った。その方法は初級学習者（６名、授業開始後12週目）が行ったロールプレイを一般日本人に見せて、次の３つの項目について印象を自由に述べてもらった。(a)学習者の発話がわかったかどうか。(b)コミュニケーションがとれたか。円滑に進んだか。(c)全体の印象。

原田ら（1998）は一般日本人が①どのような要素に注目するか、②どのような要素がプラス、マイナス評価につながるか、について分析した。その結果、一般日本人は①「文法、語彙の正確さ」といった言語規則に関するコメントより、「あいづちの有無や話の切り出し方の自然さ」といったコミュニケーションの遂行に関するコメントが多い、②学習者の悪い点より良い点に目を向ける傾向がある、などを報告している。

小池ら（1998）は一般日本人の評価と担当日本語教師による試験の評価項目の比較により、一致点と相違点を取出し、教師側に欠けているものは何かを検証した。この調査の結果、相違点として一般日本人は①言語表現以外に相手を見て、にこやかに日本語で伝えようとしていることを評価の重要な要素としている、②会話における重要な文が言えていると文体の混

同があっても不自然さや無礼な印象を感じない、③意味が分かる範囲での文法ミス、不完全文などに対してはマイナス評価をしていない、④アクセント、イントネーションの違い、不自然さは気にしていない、と報告している。

3. 調査の概要

3.1 調査の方法

「上手になった」という判断が何を基準としてなされているのかを見るために、一般日本人と日本語教師に同一学習者による時期の異なる（3～11週間の間隔がある）2つのロールプレイを視聴してどちらが上手になったかを判断し、その理由を自由に書き出してもらった。つまり、評価者は4人の学習者による計8つのロールプレイを見ることになる。日本語教師2人は同時に視聴したが、その他は個別に視聴した。最初に視聴した一般日本人から、1回の視聴ではロールプレイの時間が短くてすぐ終了してしまい、判断が困難だという意見が出たため、2回ずつの視聴とした。所要時間は個人差があって30～60分ぐらいかかっている。

3.2 ロールプレイの評価者

一般日本人：性別、年令、職業、外国経験を考慮せず、無作為に協力が得られた9名に依頼した。うち1名はボランティアの日本語教育の経験があるが、他の8名は外国人と接する機会がほとんどない。年令は20歳代～60歳代にわたっている。職業は主婦3名、会社員2名、教師2名、医師1名、大学生1名

日本語教師：直接ロールプレイを行った学習者の日本語教育には携わっていない女性5名。うち4名は北海道大学留学生センターに勤務の非常勤講師、1名は個人教師である。年令は30歳代～60歳代である。

3.3 ロールプレイを行った日本語学習者

学習者は北海道大学留学生センターの予備教育の日本語研修コースの中の既習者クラスの学生4名である。北大ではコース開始前にプレースメント・テストを行って、未習者クラスと既習者クラスを設けている。

学習者A(女)：フィンランド。ヘルシンキ大学で1年学習。北大留学生センターで全学向け日本語初級クラスで「新日本語の基礎Ⅰ」を2か月学習。

B(男)：フランス。アカデミ・メルキュール・スクールで1週間に3時間の授業を6か月受けた。教科書は特になし。

C(女)：ロシア。自国で独学。1日1時間6か月程度。教科書はナイ形、テ形までの会話主体の「今日の日本」。

D(男)：コロンビア。自国で4か月日本人から個人授業を受けた後、6か月独学。教科書は「新日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ」。

3.4 ロールプレイの内容

北大の研修コースでは会話クラスを設けており、北大で開発した会話教材とロールカードを用いて会話練習をしている。ロールカードは英語で書かれていて、挨拶、質問、勧誘、依頼などの種類がある。既習クラスでは毎回ロールプレイをビデオ撮りしているが、今回の調査では衣服などが時期判別のヒントにならないように配慮しながら、依頼表現が含まれているものを8つ使用した。ロールプレイの内容と提示順は次のようである。Pは相手の学生。

学習者A

①12月11日　A：事務員の加藤さんに今日締切の書類を出しに来た。
　　P：事務の人（加藤は郵便局にいっている)。

②11月5日　A：自動販売機の前でジュースを買おうと思ったが細かいお金がない。友達Pに両替を頼む。
　　P：Aの友達。

学習者B

①12月10日　B：違うクラスの友達ガロに彼にきた手紙を届けにきた。
　　P：ガロの同級生（ガロは病院に行った)。

②2月26日　B：教師Pに日本語で書いた手紙のチェックを頼む。
　　P：日本語教師。

学習者C

①2月12日　C：友達Pと今日5時に会う約束をしたが急用ができた。友達Pに電話をして時間を変えてもらう。
P：友達。

②1月21日　C：今日が宿題の提出日であるがまだ終っていない。教師Pにいつ持ってくるか言う。
P：日本語教師。

学習者D

①3月5日　D：函館にいる友達ガロに本を借りている。函館に行く友達Pに本の返却を頼む。
P：友達。

②2月5日　D：昨日友達PからCDを借りる約束をした。
P：約束したCDを持ってくるのを忘れた。

4. 調査結果と考察

4.1 一般日本人からのコメントについて

前述のような調査によって得られた一般日本人からの総コメント数は201であった。その中の同じ視点で述べられているコメントを分類し、7つの評価基準を設定した。以下にその基準とコメント例を示し、その内訳を表1に表す。

〈1内容：全体の内容に関するコメント〉
内容が分かりやすい／相手に意図がよく伝わった／自分の意思を伝えている」

〈2文法・語彙・表現：文法、語彙、依頼の表現に関するコメント〉
助詞がまだ上手ではない／行く・来るの間違い／依頼の表現ができる

〈3音声：発音の不明瞭、イントネーション、スピード等音声に関するコメント〉
語尾が聞き取れない／イントネーションがいい／アクセントが悪い

〈4会話運用能力：会話が滑らかに進んでいることに関するコメント〉
呼び掛けが上手／受け答えがなめらか／相手に対する返答がいい

〈5社会的言語表現：社会的な場面での適切な言語的表現。ここでは待遇表現に限った〉

敬語が上手／先生に失礼な文を言っている／「いただけませんか」が言える

〈6 非言語行動：態度、表情〉

自信がなさそう／楽しそうに話している／キョロキョロしている

表1　一般日本人によるコメントの内訳

学習者	内 容	文法・語彙・表現	音 声	会話運用	社会言語	非言語	合 計
A	8	10	11	11	0	7	47
B	2	18	10	13	6	8	57
C	6	9	11	6	0	15	47
D	14	14	8	5	0	9	50
合 計	30	51	40	35	6	39	201

この表から一般日本人がどのような点に注目して上達度の基準にしているかをみると、文法・語彙・表現についてのコメントが51と一番多く、次いで音声40、非言語39、会話運用35、内容30、社会的言語表現6の順であった。社会的言語表現のコメントが特に少ないのは8つのロールプレイ中、待遇表現に関するものが2つと少ないことに関連があると思われる。それ以外の項目に対してはほぼ平均的にコメントが得られ、様々な視点から評価されているようである。

これらの評価基準になった項目と前述の庄司（1996）の報告にある評価項目（談話形成、文法、語彙、流暢さ、発音、会話運用、社会言語的能力）と比べてみると、庄司の評価項目は言語的側面に限られていて、非言語に関する項目がないことである。また、横溝（1996）のオーラル・プロチーブメント・インタビューの報告では、採点基準（文法の正確さ、タスク遂行、発音、スピーチの適切さ、日本語話者としての自然さ）の「日本語話者としての自然さ」の項目で非言語的な行為、例えば、お辞儀の仕方、椅子の座り方などを評価している。しかし、これらはコース内での指導可能な異文化的側面であり、今回の調査であらわれた学習者の情意面に関する非言語的行為、例えば、顔つきが明るい、自信がない、会話を楽しんでいる、とは異なっている。一般日本人は余裕がある、表情が柔らか、落ち着いている、などの非言語行為は「日本語が上達している」ととらえている

ようである。

アチーブメント・テストにおいても、プロチーブメント・テストにおいても学習後に行われる試験の評価基準として学習可能なものを設定しているが、一般日本人が上達度を判断する場合は学習可能なもの以外の非言語的要素、つまり学習者の情意面に関わる表情、態度などにも強く視点が置かれていることが明らかになったと言えよう。

4.2 一般日本人と日本語教師の評価基準

一般日本人と日本語教師とで評価基準がどのように異なるかを見るために、ロールプレイを行った学習者の教育を担当していない日本語教師5名に同様の調査を行った。得られたコメント数は83で、その内訳は以下のようである。

表2 日本語教師によるコメントの内訳

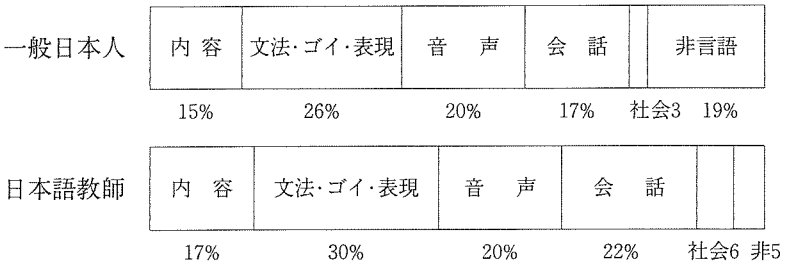
学習者	内容	文法・語彙・表現	音声	会話運用	社会言語	非言語	合計
A	7	3	5	7	0	1	23
B	1	7	5	4	4	1	22
C	3	5	5	3	1	1	18
D	3	10	2	4	0	1	20
合計	14	25	17	18	5	4	83

調査の結果は文法・語彙・表現に関するコメントが25と一番多く、順に会話運用18、音声17、社会的言語表現5、非言語4であった。

次に一般日本人と日本語教師それぞれの総コメント数に対する各項目のコメント数の割合を示し、両者を比較してみる。

図1から上達度を見る場合に両者が一番注目している項目は文法・語彙・表現であることがわかる。一般日本人からも日本語教師からも「行く／来る」、「借りる／貸す」の混同や助詞や接続詞の間違い、依頼表現の「ガロさんにあげてくれませんか」とすべきところを「ガロさんにあげませんか」と言っている不適切さ、などについての指摘があった。この結果は、到達度的評価を行っている原田ら（1998）の「一般日本人からは言語規則に関するコメントよりコミュニケーションの遂行に関するコメントが多

図1　総コメントに対する項目別コメントの割合



い」という報告とは異なっている。

また、社会的言語表現と非言語を除く内容、音声、会話運用能力についても両者はほぼ同様の視点で評価していて、重要な判定要素になっている。音声では「発音がいい」、「語尾が聞き取れない」、「イントネーションがおかしい」など、会話運用では「あいづちが上手」、「切り出しがある」、「受け答えが滑らか」など、両者から多くのコメントがあげられている。音声に関して小池らは（1998）一般日本人の評価の傾向として「アクセント、イントネーションの違い、不自然さは気にしていない」としているが、ここでの一般日本人は異なった視点で評価しているようだ。

次に社会的言語表現については、前にも述べたように評価対象の待遇表現に関わるロールプレイが2つしかないこともあって、全体に占める割合は小さいが、日本語教師と一般日本人の間に差異がみられた。例えば学習者が教師に日本語で書いた手紙のチェックを依頼した時に、教師からの「今ですか。」の問いに「今、時間がありませんか。」と応対したり、「いつまでにチェックしても（チェックすればの誤り）いいですか」の問いに「来週までにいいですよ。大丈夫ですか。」と答えていることに対して、日本語教師5名中3名が「先生に失礼な文を言っている」と感じている。しかし、一般日本人は同じ発話を聞いても「失礼だ」と感じた人はいず、です・ます体で話せれば十分で、さらに敬語が使えることに高い評価をしている。日本語教師は一般日本人より待遇表現に厳しい視点を持っていると言える。

一般日本人と日本語教師との大きな違いは非言語についてのコメントの割合である。一般日本人は19％であるのに対し、日本語教師はその約1/4の5％にすぎない。このことは到達度的評価をしていることが多い日本語

教師は自らが教育可能なもの、つまり言語的側面への注目度が高いと思われる。

次節では、2つのロールプレイを比較してどちらが上達しているかを判定する時に、一般日本人と日本語教師の判定がどのようになされたかを調べた。

4.3 ロールプレイの上達判定

一般日本人9名と日本語教師5名が学習者A，B，C，Dによって行われた時期の異なる2つのロールプレイを比較してどちらが上達しているかを判定した結果を図2に示す。実施日の下の○と●はその日のロールプレイのほうが上手だと判定した一般日本人と日本語教師を表す。▲は判断不能とした日本語教師

図2　ロールプレイ優劣判定結果

学　習　者	A		B	
実　施　日	11月5日	12月11日	12月10日	2月26日
一般日本人	○○○○ ○○	○○○	○○	○○○○ ○○○
日本語教師	●●	●●●	●	▲ ●●●
学　習　者	C		D	
実　施　日	1月21日	2月12日	2月5日	3月5日
一般日本人	○○○○ ○○○	○○	○	○○○○ ○○○○
日本語教師	●●●	●●		●●●● ●

図2をみると一般日本人、日本語教師によるどちらが上達しているかの判定は学習者B，C，Dについては一致していた。しかし、学習者Aに関しては一般日本人は時期の早いほうを、日本語教師は差は1名ではあるが逆に時期の遅いほうを上達していると判定した人が多いという結果が得られた。そこで一般日本人と日本語教師の判定が逆になった学習者Aについてのコメントをとりあげ、その評価基準にどのような差があるのかを探っ

てみる。

4.4 学習者Aに対する判定基準

図2の学習者Aに関しては一般日本人は9名中6名が時期の早い（11月5日）ロールプレイを上手だと判定し、反対に日本語教師は5名中3名が時期の遅い（12月11日）ほうを上手だと判定している。この一般日本人6名と日本語教師3名の判定基準となったコメントを項目別に以下に示す。なお、一般日本人6名は11月のロールプレイのほうが上手だと判定しているので、11月についてはプラス評価のコメントのみを、12月についてはマイナス評価のコメントのみをあげた。同様に、日本語教師3名のコメントも11月についてはマイナス評価のみを、12月についてはプラス評価のみをあげた。

表3　学習者Aに対する一般日本人6名の判定基準

（○の中の数字はコメント数を表す）

	11月5日のロールプレイ（＋評価のコメントのみ）	12月11日のロールプレイ（－評価のコメントのみ）
内　容	＊何を言っているかよくわかった。 ① ＊相手に意図がよく伝わった。 ②	＊「今日渡す」という内容が伝わらない。 ①
文　法 語　彙 表　現		＊「あげてください」より「渡す」の方がいい。① ＊沢山話しているので間違いが多い。 ①
音　声	＊イントネーションが良い。 ① ＊歯切れが良い。 ② ＊聞き取りやすい。 ①	＊口ごもる。 ① ＊語尾が聞き取れない。② ＊言葉がかたい。 ① ＊「あげて」が「あけて」に聞こえる。 ①

会　話 運　用	＊受け答えが滑らか　① ＊会話をしている感じ　① ＊「いいですよ」が 言える。　① ＊言葉のキャッチボー ルがあった。　①	＊文がぶっきらぼう　①
社会的 言　語	— — —	— — —
非言語	＊顔付が明るい　① ＊表情が豊か　① ＊表情、態度が柔らか　① ＊余裕がある。　①	＊自信がなさげ　① ＊表情がかたい。　①

表4　学習者Aに対する日本語教師3名の判断基準

	11月5日のロールプレ （－評価のみのコメント）	12月11日のロールプレイ （＋評価のみのコメント）
内　容	＊両替の理由を話して いない　① ＊状況説明が不十分　①	＊会いたい理由が話せた① ＊他方より説明が良い　①
文　法 語　彙 表　現	＊「～したいんですが」と いった方がいい　①	— — —
音　声	＊あいまいな発音が あった　①	— — —
会　話 運　用	— — —	— — —
社会的 言　語	— — —	— — —
非言語	— — —	— — —

２つの表を比べると一般日本人と日本語教師間では音声（一般日本人のコメント９／日本語教師のコメント１）、非言語（６／０）、会話運用能力（５／０）の項目でコメント数が大きく違っている。なぜこのような違いがでたかを評価対象となったロールプレイから検証してみたい。

[学習者Ａの２つのロールプレイ]

記号はつぎのように対応する　〰〰　普通より小さい音量
××　聞き取れない言葉
(2sec)　２秒のポーズ
═══　高い声になる

(1)11月５日のロールプレイ：１万円の両替を友達Ｐに頼む

Ａ：あの、すみません。○○○さん、
あ、せんえんじゅうまいありますか。
Ｐ：あー、たぶんありますよ。(7sec) もういちど。(わらう)
Ａ：(わらう) せんえん、(2sec) あー、じゅうまい (1sec) ありますか。
Ｐ：あー、せんえんごーまいと、ご、ごせんえんいちまい、いいですか。
Ａ：あー、いいですよ。あー、じゅう、じゅうまんえん、
か、かえてください。
Ｐ：はい、どうぞ。
Ａ：どうもありがとう。

(2)12月11日のロールプレイ：事務員Ｐに加藤さんへの書類を渡すように頼む

Ａ：こんにちは。
Ｐ：あ、こんにちは。
Ａ：かとうさんはどこですか。
Ｐ：あ、かとうさん、きょうはいません。
Ａ：あ、そうですかー。あ、このかみはとてもじゅうようです。
Ｐ：うん。
Ａ：きょうはしめきりです××、あー、じゃー、あー、あー、
このかみをあげてくれませんか。
Ｐ：あー、わたしはきょうこのかみをあげます。いいですか。
Ａ：はい、どうもありがとうございます。
Ｐ：あー、どういたしまして。

(1)と(2)を比べると(1)のほうはタスクが簡単で、使用表現も単純である。また、言いよどみや音声の高低も少なく、文末の不明瞭さはない。笑いもあるし、AはPのお金を調べる動作を待っていて、次の発話までの時間的余裕がある。(2)はタスクが複雑なので(1)より難しい語彙や依頼表現を使っているが、聞き取れない言葉があり、言いよどみが多い。また、音声面での高低が多くみられる。

これらの2つのロールプレイの特徴から一般日本人は音声がはっきりしていて内容が分かりやすく、楽しい雰囲気の(1)の会話を上手になったと判断したようだ。一方、日本語教師は会話運用や非言語面には視点をおかず、(2)のタスクの理由が言えたこと、説明がよいことが判定の基準になっている。このように同じロールプレイを見ても、視点の重さによって反対の判定結果になる。この結果は非言語的側面にも注目する一般日本人と、常に言語的側面に注目する日本語教師の特徴を表していると思われる。

5. おわりに

日本語学習者の上達度を見る時の一般日本人と日本語教師の評価基準について考察してきた。

一般日本人の評価基準の特徴は文法・語彙・表現、音声、非言語、会話運用能力、内容など様々な視点から評価していることである。また、到達度的テストの評価基準が指導可能な言語的、異文化的側面に設定されているのに対し、上達度評価では表情や態度などの情意的非言語面も重要な要素になっていることが分かった。

一般日本人と日本語教師は上達度を計る場合、両者とも文法・語彙・表現に一番注目しており、内容、音声、会話運用にも重きを置きながら評価しているが、社会的言語表現（待遇表現）に関しては日本語教師のほうが厳しい評価をするようである。両者が大きく異なった点は非言語に関する視点である。一般日本人は非言語も重要な評価基準にしているのに対し、日本語教師はほとんど注目していないと言える。また、一般日本人が評価対象の会話内容によっては文法・語彙・表現より音声や非言語項目に視点が集まる場合があることと、日本語教師が常に内容や文法・語彙・表現などの言語規則に視点を置いた評価をする傾向があることも加えておく。

以上の結果から我々日本語教師は一般日本人と接触することの多い学習者のために、一般日本人の評価基準を考慮に入れて、分かりやすい適切な

音声と非言語的側面が大切だということも認識しておきたい。

今回の調査は期間の差があまりない2つのロールプレイの優劣を比べたが、期間をもっと隔てて行った場合や中上級の学習者によるロールプレイを用いた場合、また評価者が多人数の場合などでは評価基準にどのような違いが現われるのか興味のあるところである。

最後に今回の調査に協力してくださった14名の評価者の皆様にお礼を申し上げたい。

参考文献：

河合靖（1998）「プロチーブメント・テスト」上田雅信編『日本語を学問する』北海道大学言語文化部研究報告叢書23、pp.63-84

小池真理他（1998）「学習者の会話能力に対する評価にみられる日本語教師と一般日本人のずれ」『日本語教育方法研究会誌』Vol.5No.1、pp.32-33

庄司恵雄（1996）「研修コースのための口頭能力修了試験」『日本語教育』91号、pp.108-119

原田明子他(1998)「一般日本人は学習者の日本語をどのように評価するか」『日本語教育方法研究会誌』Vol.5　No.1、pp.8-9

牧野成一監修・日本語OPI研究会訳（1995）『日本語版ACTFL-OPI試験官養成用マニュアル』アルク、pp.21-30

横溝紳一郎（1996）「オーラル・プロチーブメント・インタビュー」『日本語教育』88号、pp.61-73

馬瀬良雄他（1998）「外国人の言語行動に対する日本人の意識」『日本語教育』67号、pp.25-47

なかがわ　みちこ（留学生センター非常勤講師）
いしじま　まさこ（留学生センター非常勤講師）

Bulletin of International Student Center Hokkaido University No. 2 (1998)

Criteria for evaluating the conversational performance of learners of Japanese

NAKAGAWA, Michiko and ISHIJIMA, Masako

This study is concerned with the evaluation of progress during the process of learning a second language and, in particular, with differences in the criteria of progress as evaluated by Japanese language teachers and ordinary Japanese speakers.

The study is based on the comments of Japanese language teachers and ordinary Japanese speakers concerning two role plays performed by Japanese learners on different dates.

The main results obtained are as follows:

(1) For ordinary Japanese speakers, non-verbal aspects of communication are important as well as verbal aspects.

(2) Japanese language teachers on the whole have a tendency to place emphasis on linguistic expression.